
1 2月のかき氷

管理人28号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

12月のかき氷

【Zコード】

Z6020S

【作者名】

管理人28号

【あらすじ】

目が覚めると記憶喪失になっていた1人の男。その前に現れた妻と息子はどこか普通じゃない・・・。記憶のない男がつづる、妙な家族との奇妙な日常。

〔11月9日〕

医者に、日記を書くように言われた。少しでも多くのことを記憶しておいた方が良いとの理由からである。

痴呆症でも発症したのかと尋ねると、痴呆症ではなく、一時的な記憶障害が自分の脳内で起きているとのことである。再発の可能性はないが、医者に「どうせ暇なんだうし、せっかくだから記憶喪失者っぽいコトでもしきなさい」と言われてこのノートを渡された。それくらいのことでの日記をつけるのは面倒くさかったが、医者の意見は絶対だと、何も覚えていないはずの脳が命令するので仕方なくこれをつけることにする。

〔11月10日〕

改めて書くが、どうやら自分は記憶喪失らしい。

といつても、全てが思い出せないわけではない。自分が思い出せる記憶は成長期の途中まで、しかもぼんやりと、「高校の時の科学の成績は3だつたな」くらいのものである。

しかし自分は、今年で37らしい。自分で言つのも何だが、高校はもちろん、青年すらとつぐに卒業している。いいおっさんだ。

それを考へると、かなりの量の記憶を置き忘れたような気がする。

〔11月11日〕

病院に妻を名乗る女と息子を名乗るガキが来た。書き忘れていたが、自分は今病院に入院している。しかし身体に異常はない。記憶が飛んだのは何かしらの衝撃を頭に受けた事が原因らしいが、検査入院を終えればすぐ家に帰れるという話である。

病院に来た女とガキは、見覚えがない顔だった。それを素直に言つと女がぎやーぎやー泣き出した。

ウザイと言つたら更に泣いた。しかしガキは笑っていた。「記憶が無くなつても母さんの扱い方は同じだね」とまで言われた。悟つたような言い方が、非常に腹立たしかつた。

「11月12日」

今日もまた女とガキが来た。一人にして欲しかつたが、家族というのだからしようがない。

今日は女がアルバムという物を持つてきた。

女と自分とガキが写る写真が沢山貼つてあつたが、自分が笑つて写つている写真は一枚もなかつた。

思わず本当に家族かと訪ねたら、また女が泣き出した。

昨日とまったく同じやり取りを繰り返した後、女とガキは帰つていつた。

明日は来ないとうれしい。

「11月13日」

願いもむなしく、女とガキはまた来了。

今日は女の手作りらしい弁当を持参してきた。弁当箱をさわると妙にひんやりしており、嫌な予感がした。

中を開けると、案の定、解凍されていない冷凍食品がぎっしり詰まつていた。

それを食えと女は言う。ガキも「父さん、いつも食べてたじゃない」と笑顔でいう。

・・・どんな嫌がらせだ。

むかついて突き返すと、女はやつぱり泣いた。（後は昨日と同じなのでもう書かない）

〔11月14日〕

今日はあの一人が来なかつた。

静かな病室は久しぶりだが、いつあいつらが来襲するかと思つと、なかなか落ち着かなかつた。

・・・しかし結局、面会時間が終わるまで女とガキは来なかつた。あのうるさい泣き声に耳が慣れてしまつたせいか、静けさが妙に落ち着かず、昼寝も出来なかつた。
どうまでも迷惑な奴らである。

〔11月15日〕

いきなり退院しろと言われた。

病院も飽きたので了承すると、女とガキが向かえに来た。昨日来なかつたのは、今日のための準備が忙しかつたかららしい。

病院を出ると言つことは家に帰ることだと、今更ながらに気がつき愕然とした。

今日からあのふたりと一つ屋根の下で暮らすのかと思うと、新たに記憶障害が起きそうなほど頭痛がしたが、他に帰る場所は無いようだつたので、仕方なく俺の家とやらに向かつた。

家は古い日本家屋だつた。大きすぎず小さすぎず、しかしどにかく古い。だが中へはいると、どの部屋も意外に綺麗に整頓されている。ただ一つ問題があるとすれば、居間の隅にデカイ冷蔵庫が陣取つていることだらう。

台所にも一つあるのに何故かと尋ねると、女が笑いながら冷蔵庫を開け、その中へ出たり入りを繰り返し始めた。

どうやら、この女も俺同様、頭に何かしらの問題を抱えているようだ。

そう思つ俺の思考を見透かしたように、ガキが始終にやにや笑つて

いた。

「11月16日」

朝起きると、女が隣に寝ていて驚いた。

今更だが、こいつが自分の妻であることを思い出す。

思い出すと言つても、認識出来るのは『そう言つ事実がある』という事だけで、どうして結婚したのかとか、何故好きになつたのかと言つことは思い出せない。

だが改めて近くで見ると、なかなか綺麗な顔をしていることに気がついた。しかし少し若すぎる気もする。下手すると20前後に見える。

もしかしたら、俺はロリコンだったのかもしれない。そんなことを考へていると、今更ながらに男としての感情が若干顔を覗かせたが、勢いで押し倒すには、冷蔵庫に出たり入ったりしている女の行動が印象的すぎた。

「11月17日」

今日は朝から女があらず、ガキと一人きりで過ごした。

午前中はずつとテレビゲームをして過ごした。俺はストリートファイターと桃太郎電鉄が異常に上手いことを発見した。しかしぷよぷよはガキには適わなかつた。格闘ゲームでは勝てて、パズルゲームで負けるというのは複雑な心境だと話すと、テトリスは上手だつたと教えてくれた。

午後は一人で近くのスキー場に行つた。

昨日ニュースで、地球温暖化の影響で日本から雪が消えつつあると言つていたのに、どういうわけだかこのスキー場には雪が多い。それも人工雪ではなく、自然の雪である。

ガキに理由を聞いてみると、雪女伝説の発祥の地だからじゃないか

と言われた。そんな理由で雪が降るなら、とつぐの昔にぬりかべがオゾンホールを修復していくことだろう。

それともう一つ、スキー場に来て発見したことがある。それは自分が異常なほどスキーが下手だという事だった。変わりにボードで滑つてみたが、こちらはなかなか様になつている。

人が少ないこともあり、調子に乗つた俺はガキと一人で夕方まで初心者用コースを50往復した。

明日は筋肉痛になる予感がする。

「11月18日」

ガキと二人で、朝から筋肉痛で動けなかつた。

仕方なくまた一人でゲームをやつていると、「日曜だからつてダラダラしないの！」と女に怒られた。

母親みたいな事を言うなと言うになつてからふと、女がガキの親であることを思い出した。

しかし最近気づいたのだが、この女、家ではいつさいの家事をしない。

洗濯と掃除はガキの担当、食事の用意は一昨日から俺がやつている。女に料理を任せると、冷凍食品しか出でこないのである。

さすがに冷たいコロッケとハンバーグには飽き飽きしたので、何気なく変わりに作つてみたらこれが意外に楽しい。

記憶がない割に料理のレシピなんかはかなり覚えていし、味もそんなに悪くない。女はいじけているのか、俺の料理を頑なに食べない。しかしガキの反応は上々である。

良い気分になつて、「お前がいなくてもやつていけるな」と女に言つたら、久しぶりにまた泣かれた。

「11月20日」

田記をつけ始めて10田田になるが、俺の記憶は戻る気配がなかつた。

医者の話では記憶の喪失は一時的な物らしいが、それにしてもまったくと黙つていいほど思い出せる事がない。

それを女は気にしているらしく、久しぶりにアルバムを持ち出してきたが、本当に家族なのかといつ疑問が募るばかりで成果はなかつた。

「11月21日」

今日は朝から、調子が悪いと言つたきり女が冷蔵庫から出でこない。調子が悪いならなおのこと冷蔵庫はまづいと思うのだが、ガキが言うには冷蔵庫が女の精神安定剤らしい。

仕方なく放つておいたら、夕方になつてようやく出でてきた。

夕食におかゆを作つてやつたが、女は「ふーふーしてくれないと食べれない」とか馬鹿なことを言つだした。聞こえないふりをすると、女は泣きべそをかきながら冷蔵庫の中へと戻つていつた。

しかし先ほど、田記をつけていないことを思い出して起きてみると、朝ご飯にしようと取つておいたおかゆが全て無くなつていた。

気になつて冷蔵庫を覗いてみると、女が頬に米粒をつけたまま熟睡していた。

「もうたべれない」とか寝言まで言つていてた。

それなら食つなど言いかけたが、起こすのも気が引けたのでそのまま冷蔵庫を閉めた。

「11月22日」

今日は良い夫婦の日らしく、女が朝からハイテンションだった。ついでに今日は結婚記念日もあるらしい。

だからどうしたと思ったが、へたに茶々を入れて泣かれると面倒なので、好きに騒がせておいた。

それをどう勘違いしたのか、調子に乗った女が「たまにはキスしろ」とか馬鹿なこと言い出したので、最後は軽くはり倒して無理矢理冷蔵庫に押し込み、一人でボードをしにスキー場へ行った。

スキー場では、始めて女とガキ以外で俺の顔なじみに会った。

高校の時の同級生だという女で、どうやら俺と職場も同じらしい。彼女と出会ったことにより、俺はこのスキー場でスノーボードのインストラクターをして稼いでいることを今更のように知った。

仕事を休んでのうのうとボードをしに来ている自分に軽く恥ずかしさを覚えたが、今は静養中扱いになっているらしく、同僚は笑つて俺にウェアを貸してくれた。

そのうえ彼女は、上級者コースへ俺を連れて行ってくれた。インストラクターをやっていたのは本当にしひく、上級コースも難なく滑れた。

結局一人で話をしたり滑ったりを繰り返しているうちに、夜になってしまった。

彼女と別れて家に帰ると、居間の冷蔵庫の中で女が泣いていた。なんでも、俺と同僚が談笑しているところを見たらしい。

嫉妬している女を見て思わず、やましいことなど無いのに言葉を詰めさせてしまった。

〔11月23日〕

今日は朝から一日中、女が冷蔵庫から出でこなかつた。

〔11月24日〕

今日も朝から、女は冷蔵庫から出でこなかつた。さすがに心配になつて扉を開けようとすると、ガキに呼び止められた。

話があると別室に連れ出されると、そこで俺はガキから驚くべき話を聞いた。

あまりに衝撃的すぎて、未だに頭の整理がつかない。日記に書こうにも言葉の整理もままならないので、落ち着いてからにすることがある。

〔11月25日〕

今日も女は冷蔵庫から出でこない。恐る恐る扉を開けてみると、目を真つ赤に腫らした女が冷蔵庫の中で体育座りをしていた。出てこいと言ったが、女に無視された。その頑なな態度に思わず力ツと来て、無理矢理引きずり出そうと女の右腕に触れてみると、それはまるで氷のように冷たく、固かつた。

妙だと思いつつもそのまま引っ張つたら、右腕は肘のところでボキンと折れた。骨ではなく、腕そのものがぽきりと折れた。女は悲しいような、困ったような顔をしていたが、どういづワケだが俺はそれを見ても驚かなかつた。

それよりもむしろ、昨日ガキに言われた言葉をようやく理解出来た感動の方が大きかつた。

信じられないような話だが、どうやら、俺の妻は人ではないらしい。それをようやく理解して、俺は女に右腕を返してやつた。

〔11月26日〕

今日は朝から、女が冷蔵庫の外にいた。腕もしつかりくつついている。

便利だなどいうと、女は「雪女ですから」と言った。

冗談だとは思わなかつた。昨日あんな光景を見ていたこともあるが、記憶をなくしたとはいえ、自分の体と頭は、こんなヘンテコな日常に慣れきっている節がある。

記憶喪失になつてもたゞして驚かなかつたのも、きっと雪女を嫁に貰うつという異常な快挙を、過去の俺が成し遂げていたからに違ひない。きっと俺はもう、対外のことでは驚けないのだろう。

改めて、自分の神経の図太さを思い知った。

〔11月27日〕

朝起きると、久しぶりに女が隣で寝ていた。
ただでさえ暖房が壊れていて凍えるように寒いのに、雪女が隣にいるとなおのこと背筋が凍える。

だが反対に、女が俺の体温で溶けることはないのかと気になつた。
気になつて寝ている女をずっと観察していたが、溶けるどころかこちらの体が冷えてしまった。

もし今が夏ならば、抱き枕代わりにするのも良いかもしないとふと思つたが、冬場は寄りつかないと注意した方が良いかもしない。

〔11月28日〕

朝から女がいないと思つたら、バイトに行つていたらしい。

あの特異体质でバイトはマズイのではと訪ねると、スキー場に雪を降らせる仕事だと言うから納得した。

日給3万で、週に2・3回程度。天候によつてはもっと降らせる時もあるといつ。

なかなか割の良い商売をしているなと感心しつつ、そろそろ自分も仕事に戻らなければならぬ気がしてきた。

それを告げると女は大反対したが、ガキは相変わらずの悟り顔で「いいんじゃない」と笑っていた。

〔11月29日〕

ガキが風邪を引いた。

雪女の子供のくせにヤワだなと笑つたら、半分は俺の血が混ざつて
いるのだから仕方がないと返された。

布団を被つて寝ているガキを見ていると、改めて自分は父親なのだと認識する。

それから今度は自分の父親のことを考えたが、親父のことも上手く思い出せなかつた。

今まで「そのうち想い出すだろ」「うう」くらいに思つていたのだが、もしかしたら自分は少々樂觀的すぎたのかもしれない。と言うか、思い出せない人々に対しても失礼だと言つような気がしてきた。

よくよく考えれば、自分の肉親に顔を忘れられ、その上「まあ、覚えて無くても良いだろ」という態度をされたら普通はムツとする。女はともかくガキはいつも冷静な事しか言わないが、それでもたまに、あの悟りきつた表情に影が差す瞬間がある。

もしかしたらそれは自分が原因で、そもそも、あのムカツクブツタみたいな微笑に一番ムカついているのは、あのガキ自身かも知れないとthought。

そんな感じでわずかながらも反省した俺は、今更ながらにガキに名前を聞いた。実はまだ聞いてなかつた。我ながら酷い父親である。そして俺は、ガキの名前が鉄雄であること。自分の名字が南方であることを知つた。

「11月30日」

ついに11月も今日で最後になつてしまつた。

それなのに俺は何も思い出せず、鉄雄は相変わらず風邪で寝ており、女は冷蔵庫の中でアイスキャンディーばかり食つている。

「12月1日」

12月になつた。

だからといって特に何が変わるというわけではなかつた。

鉄雄は元気になつてきたが、相変わらず女はアイスばかり食つており、俺は隣の家のじいさんの名前が想い出せなくて回覧板を回すのに手こずつた。

本当に進歩がない。

「12月2日」

今日は街の商店街に行つた。

実はまだ、俺はスキー場と病院と隣のじいさんの家以外で、普通の人々が集まる場所に行つた事がなかつた。

バイトで女がいなかつたので、鉄雄と一人きりで出かけた。そもそも女は街へはあまり行かないと鉄雄が言つていた。さすがに、町中で腕をポロポロ落とすのが迷惑であることを、女も理解しているらしい。

それにしても、この街・・・と言つかこの村は狭い。

商店街と言つても、寂れた土産物屋ばかりが集まる小さなアーケードがぽつんとあるだけで、コンビニはあるかレストランもない。（定食屋はいくつかあつたが）

それでも駅前にジャスコがあるので、村人たちは何とか暮らしてい るようだ。

試しに入つてみると、意外にも沢山人がいた。殆どはスキー上目当 てにやつてきた客のようだが、村の人間らしき何人かの老人（顔は覚えていないが）とは挨拶を交わした。

大抵の人たちは俺の顔を見るなり「大丈夫ですか」「あまり無理を なさらないでくださいね」等の暖かい言葉をかけてくれる。 つくり自分は人外の生き物にしかすかれていないとthoughtていたの で、これには少々驚いた。

〔12月3日〕

突然同僚に呼び出された。

さすがにそろそろ「仕事を休みすぎだ」というお叱りの電話が来る頃だろうと思っていたので、言われたとおりの場所に渋々向かつた。指定された場所は村役場だった。それも何故か村長室と書かれたこぎれいな部屋だった。

村長直々におしかりを受けるほど休んだ覚えはなかつたが、もしかすると記憶をなくす前から、俺は村長にも目をつけられるほど怠惰に職務をこなしていたのかも知れない。

しかし部屋に入った俺の前には、高級茶菓子が置かれていた。
食べと言わたので、言われるがままに食べていたら、同僚と見知らぬ人たちが遅れてぞろぞろやつてきた。どうやら、皆俺の友人達らしい。

食べるのに夢中で話の内容はあまり覚えていないのだが、記憶をなくす前の俺は村人に慕われるような立派な人間であったこと（これを聞いて少し安心した）、故に村中の人々が俺の体を心配していること、そして俺のこれから的事を心配していると言うような話を耳にした気がする。

別に心配されるほど困つてはいないのだが、どういう訳だが友人達の間では、俺の記憶喪失は雪女に殺されかけたのが原因と言うことになつているらしい。

その部分は少々気になつたので訪ねてみると、記憶喪失に陥る前の俺は雪女のことを持ち出していたらしい。

結婚も雪女のねつ造で、本当は同僚と恋仲だったとまで言われた。なら鉄雄はどうやって説明するのかと尋ねると、「お前はそそのがされたのだ！」と村長に断言された。

そそのかされた位で、あんな冷たいだけが取り柄の冷凍マグロみたいな女と寝たりなんてしたくないと思ったが、あえて黙っていた。

とにかく、彼らが言いたいのはあの女が超危険人物で、俺の記憶喪失もあいつの所為だという事らしい。

やたらと熱く語られたので途中で嫌になり、「はい、そうですか」と流して帰つてきました。友だちに取る態度ではないと思つていたが、その時の俺は無性に頭に来ていた。

家に帰つて今日の出来事を話すと、女はやけに落ち込んでいた。冷凍マグロみたいな・・・という感想まで話してしまつたのが、まづかつたかもしない。

その後同じ話を鉄雄にすると、「嫁に貰うならどう?」と真顔で訪ねられた。

冷蔵庫にしまえるから女の方が良いかなとこたえると、鉄雄は始めて、ムカツクブツタではなく、母親に似た屈託のない笑顔を浮かべた。

〔12月4日〕

久しぶりに朝寝坊をしたのが行けなかつたのだろうか。毎朝5時起きている俺が、今日に限つては7時になるまでまったく目を覚まさなかつた。その上、慌てて居間に向かうと、朝だというのになぜだか同僚がそこにいて、女と何やら口論をしていた。と言つより、女の方が一方的に怒鳴られていた。

妖怪が人間に負けてどうする、と寝ぼけ頭で思わず突っ込んだら、今度は俺が同僚に怒鳴られた。

いい加減に目を覚ませ、とか。この女は化け物なのだ、とわかつたような口を叩かれて正直頭に来た。ハツキリとした理由はわからなかつたが、どうやら俺は他人に女の悪口を言わると腹が立つ性格らしい。たぶん、昨日勝手に話を切り上げて帰つてきてしまったのも、同じ理由なのだろう。

ただ、今日の自分は昨日より大人になれなかつた。たぶん寝起きがいけなかつたのだと思う。

女が化け物だなんて今更言われなくても理解している。一緒に暮らしていて気づかないほど俺は間抜けではない、といつも怒鳴り返したら、今度は同僚に泣かれた。

同僚が泣き出すと、どういう訳だが女も泣き出した。正直かなり困ったが、鉄雄は我関せずといった顔でめざましテレビを見ているので、なだめるのは俺しかない。

そのあと30分ほどかけて、俺は同僚を何とか家へと帰し、女を冷蔵庫に入れた。

気がつくと鉄雄はすでに学校に出かけていた。もう少し親父の役にたってくれても良いと思つたつても良いと思つた。

「12月5日」

今日もまた朝から招かれざる客がいるのではと思ったが、朝の居間にには女しかいなかつた。

かき氷が食いたいと言い出でるので台所の床下にある小汚い収納スペースからかき氷マシーンを探し出した。かき氷は女の好物であるにもかかわらず、機械は妙にほこりべすべく、動かしてみると氷より先に錆がこぼれ始めた。

いつから使つてないのかと尋ねると8年くらい前だという。8年もかき氷を絶食していたのかと訪ねると、8年間この家でかき氷を食べていないと言われた。

何故8年なのかと尋ねると、8年前に女と俺がケンカ別れをしたからだと言われた。

別居かと尋ねると、離婚のような気がすると女が言った。

なら何故ここにいるのかと訪ねると、嫌いだったことを俺が思い出す前に、俺の作ったかき氷をもう一度食べたかつたからだと女は言う。

仕方ないので、ヤスリを使って氷を削り、賞味期限切れのカルピスシロップを使ってかき氷を作つてやつた。

ヤスリでかき氷を作るのは非常に骨が折れることが判明したので、明日かき氷器を買いに行こうと提案したら、女はまた泣いた。

〔12月6日〕

今日から鉄雄の学校では冬休みが始まった。

始まりがあまりにも早いので、もしやズル休みしたいが為の嘘なのではと疑つてみると、雪国は夏休みより冬休みの方が長いのだと言われた。

雪国育ちのくせに、そんなことも忘れていた。

午後は3人でかき氷製造器を買いにジャスコに行つた。しかしそくよく考えると今は冬で、かき氷器など売つているわけがなかつた。仕方なく、アマゾンとか言うインターネットショッピングで、980円という破格の値段で売つていたペンギンマークのかき氷器を購入した。

〔12月7日〕

今日は久々の定期検診の日だつた。

相変わらず記憶は戻らないが、脳には異常がないので大丈夫だと医者に言われた。

せっかくここまで來たので、俺はさり気なく自分が記憶を失つた原因を医者に聞いてみた。女はその事に關して黙つてゐるし、村長たちの話は来ているとムカツクので、一番客観的意見をくれそうな医者に聞くのが一番だと思ったのだ。

訪ねると、医者は何の躊躇いもなく「雪崩に巻き込まれたんですね」と答えた。

村長に雪女の所為だと言われたと告げると、医者に大声で笑われた。彼女がいなければこんな軽傷ではすまなかつたとまで言われた。改めて言わると、なぜだか少しほつとした。

女に恐怖を抱いていたわけではないが、医者の一言で胸の支えがとれたのは事実だった。

〔12月8日〕

朝起きると外は吹雪だった。

案の定女はバイトに出かけており、午前中は鉄雄と一人でテレビを見て過ごした。

テレビでは泥沼離婚に陥った夫婦の再現VTRばかりを流すワイドショーが映し出されていた。

あの夫婦は妻の方がダメなんだとか、こんな生活を続けるなら離婚して正解だとか、そういう話で盛り上がり上がっていると、タイミング悪く女が帰ってきた。

何をどう勘違いしたのか、「そろそろ山に帰る」とか馬鹿なことを言い出した。あんまりうるさいので無理矢理口をふさぐと、どういふ訳か真っ赤になつて冷蔵庫にこもってしまった。

おかげで鉄雄と一人、午後も気兼ねなく「ロロロロして過」せた。

〔12月9日〕

今日から仕事を再開することにした。

自分はやれば出来る男だと言い張つて生徒の前に立たせて貰うと、本当にどうにかなつた。

正直かなり教え方はテキトウだったが、「先生、本当に記憶をなくしたんですか?」と何度も訪ねられた。口から出任せを列举しているだけで喜ばれるのだから、インストラクターとは何とも簡単な商売である。

仕事を終えて詰め所のロッジに行くと、同僚が俺を待っていた。

この前の事を謝ろうとするので、気にするなど言ってやつた。確かに突然あんな事を言われて頭に来たのも事実だけど、彼女や友人達

が俺を心の底から心配してくれているのはわかっている。

誰だつて、妖怪と暮らす生活なんて理解できない。正直俺だつて未だに理解出来ていらない氣がする。

だから、彼らの心配が間違つた方向に向いてしまつたのは当たり前のことで、俺はそれに怒るのではなく、「大丈夫」だと笑つていれば良かったのだ。

最後に同僚は、今更のようにあの女が好きなのかと尋ねてきた。
好きじゃないと答えた。

その後で、嫌いでもないと付け加えた。

同僚は笑つて、もう一度自分が勝手だつたと詫びた。

「12月10日」

今日も仕事に行つた。

いい汗をかいだ。

だが家へ戻るつたと汗が引いた。女が久しぶりに料理をしていたからである。

「12月11日」

朝から腹が痛い。理由はわかつてゐる、そしてあえて書かない。

仕事から帰ると、かき氷器が届いていた。
開ければいいのに、女も鉄雄も俺が帰つてくるのを待つていたらしい。
小生意気なガキの口みたいなマークが書かれた箱を開けると、当たり前だがかき氷器の箱が姿を現した。

この家の辞書に説明書を読むという言葉はないので、早速氷をぶち

込んで取つ手を回してみた。

なかなかよい具合にかき氷が出来た。

昨日の今日で冷える物は勘弁だったが、女がとても上手そうに食べるので、ついつい茶碗3杯分も食べてしまった。

とはいえ別に格別美味しいわけではない、所詮氷とシロップである。だが女はかき氷がたいそう気に入つたのか、俺の10倍は食べた。そして今日はかき氷器を抱いて寝るといつ。

さすがにそれは嘘かと思ったが、先ほどこいつそり冷蔵庫を開けてみたら、本当に抱いて寝ていた。

予想外の光景に思わず笑うと、女が目を覚ました。

目が合うと妙に氣まずくて、俺は慌てて名前を聞くことで場を「口」マカした。俺は女の名前も実はまだ知らなかつた。

当ててみると切り替えされたので、「お菊」とテキトウに答えると「それは番町皿屋敷だ」と言つてまた泣かれた。

いつになつたら思い出してくれるのかと騒ぐので、「思い出しても出さなくとも、俺が嫁に貰つたのは、皿を割つた幽霊ではなくお前だ」と言つてやつたら、泣いているのか笑つてているのかわからない顔で抱きつかれた。

冷たい体は、12月の寒い夜にはとてもこたえたが、それを言つとまた泣くだろうから、黙つてしまつた。

(後書き)

「成田離婚」、「父と冷蔵庫」に続く雪女シリーズの3話目。一応完結編です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6020s/>

12月のかき氷

2011年4月20日17時59分発行